

Title	高僧傳の成立(上)
Author(s)	牧田, 諦亮
Citation	東方學報 (1973), 44: 101-125
Issue Date	1973-02-28
URL	http://dx.doi.org/10.14989/66492
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

高僧傳の成立(上)

牧 田 諦 亮

はじめに

一、慧皎の生涯

二、高僧傳以前の僧傳應驗記類

三、名僧傳と高僧傳

四、高僧傳目錄對照表

注

はじめに

梁の慧皎の撰述にかゝる高僧傳は、中國に佛教傳入の初期から六朝後期梁の天監十八年までの約五百年の間に、譯經・義解・神異・習禪・明律・亡身・誦經・興福・經師・唱導の十科にわたつてそれ／＼に活躍した高僧の傳記である。中國初期の佛教史研究のためのみでなく、この期間の中國思想史・社會史などの究明のためにも必要不可欠の基本史料の一つである高僧傳の研究には、若干のかつ重要な成果はあるが、從來等閑に附されてきた中國佛教史學史の系統的な研究確立のためにも、高僧傳の成立についてさらに研究を進めることの必要を感ずるにいたつた。本稿は、撰者慧皎の生涯、高僧傳以前の僧傳應驗記類・名僧傳高名僧傳、同對照表(以上本號)、高僧傳十科の分類・慧皎の歴史觀・敦煌本高僧傳類、石山寺本高僧傳などについて研究を進めようとするものである。

一 慧皎の生涯

高僧傳の著者慧皎（四九七—五五四）の傳歴については、高僧傳の慧皎自序、後序、王曼穎の慧皎への書信、續高僧傳の慧皎傳などによつて概略を知ることができる。

梁の會稽嘉祥寺釋慧皎として傳えられる唐の道宣（五九六—六六七）の續高僧傳の記載^②その他によつて慧皎の傳記を組み立てると次のごとくである。

慧皎、その氏族は未詳、浙江會稽上虞の人。内學外典に詳しく、博く經律を訓へ、のち邑西の嘉祥寺に住した。この寺は王導の第六子蒼が會稽郡守であつたときに竺道壹のために建てたものである。春夏には布教に専念し、秋冬には著述につとめた。涅槃義疏十卷・梵網經疏などが世に行なわれたというから、慧皎の宗とするところが涅槃であり、律部であることが知られる。

慧皎が高僧傳を撰述したのち、これを親交のあつた王曼穎に送つて批評を求めているが、この時期は確定しがたい。また王曼穎の經歴については深く知るところはない。わずかに隋書經籍志には「補續冥祥記一卷王曼穎撰」とあるから、これは王琰の冥祥記を補續したものであろうし、また王曼穎の學問の志向したところも察せられる。また、梁の武帝の異母弟南平王元襄王偉（四七六—五三三）の傳によれば、晩年佛教を崇信しことに玄學に精しかつた南平王は眞俗二諦義についての「二旨義」という著書もあり、弘明集卷十には、武帝の神滅論批判への答書も見える。議論だけでなく、その佛理を實踐して慈悲ぶかく窮乏のものには慍れんで、つねに腹心のものを閭里の人士につかわして歴訪せしめて、もし貧困のため吉凶の儀式を擧げることのできないものがあれば、金品を送つて贍恤した。太原の王曼穎が死んだ時、その家は頗る貧しく殯斂することかなわなかつたほどであつた。曼穎の友人で、南平王長史御史中丞であつた江革は友人の死を見舞つたが、遺族たちは葬儀も出せない貧困さを訴えたところ、江革は、ほどなく南平王が必ず都合よくやつてくれるだろうという言葉も終らぬうちに、南平王の使がきて

葬事の費を給してとどこおりなく終えたといふ^③。歴官數十年、しかもかたわらに姫の侍するなし、家はただ壁立^④すと傳えられる江革の友人であれば、王曼穎自身の清貧もまた世に賞せられるべきものであつたことが推察されるのは當然であらう。南平王は武帝の中大通五年（五三三）五十八歳で薨じているから、王曼穎の死はさらにこの年よりもさかのぼる。

内典博要三十卷（梁書本紀は一百卷）の著述もあつて佛教にも曉通していた梁の孝元皇帝蕭繹（五〇八―五五四）の撰述した金樓子卷二・聚書篇には、「今年四十六歳、自聚書來四十年、得書八萬卷」とあつて、その蒐書の苦心を陳べているが、ここに「會稽宏普寺の惠皎道人に就いて搜聚した^⑤」と記すことから、慧皎が元帝からも注目されるほどの藏書を有していたことが知られる。その慧皎の藏書を元帝が何時ごろ入手したかはあきらかではないが、のちにも記すごとく、侯景の難を避けて江西に逃れた最晩年のことではなかつたらう。これらの慧皎からの蒐書をもふくめて、帝四十七歳の承聖三年（五五四）十二月上旬には十餘萬に及ぶ藏書をことごとく灰燼に歸してしまつたことは史書に著しい。蒐書狂ともいえる元帝が注目した慧皎の藏書は、當然、慧皎の壯年期における彼の研學を示すものである。これらが主著の高僧傳撰述にも重要な資料となつたことが當然豫想されるのである。

高僧傳の著作は、慧皎の自序に、その記事が漢の明帝永平十年（六七）に始まり、梁の天監十八年（五一九）に終ると明記していることから、この天監十八年をもつて撰述年時とすることが通説となつてきている。しかしこれは山内晉卿氏も指摘するやうに、内容の最終年代であつて撰述年代ではない。慧皎自身、この年、わずかに二十三歳の青年僧であること、寶唱の名僧傳が續高僧傳卷一の記載によれば、天監十三年頃撰述と史料されること、天監十八年から普通元年へと改元のことがあり、一つの時代の區切りとしたこと、送呈した高僧傳に對して適切な批評を下した王曼穎の死が、中大通五年（五三三）に死んだ南平王偉よりも溯ること、などから推して、高僧傳の撰述が、天監十八年よりなお十年あまりの後のこと、おそらくは慧皎の三十歳代半ばの著作であらう。ただ高僧傳に先行した名僧傳の著者寶唱は、まさに三十歳ならんとして父母の死に遭つて喪に服し、喪事すべて畢つて、建武二年（四九五）都建康に出て講肆に遊歴してのち、南齊末期の混亂期に遠く閩越に逃れ、梁の武帝の天

下一統ののち、天監四年（五〇五）に都に出て、武帝の歸信を得て、そののちは帝權に親近して華麗な生活を送つたといふ⁽⁶⁾。天監十三年ごろ名僧傳を撰述したり、帝室の華林園寶雲經藏を管掌したりなどした寶暉とは、三十年以上ものへだたりのある慧皎は、律僧にふさわしい質素な生活に終始し、その周圍には、王曼穎のような清貧のうちに生涯を送り、葬事にも不如意な人々と親交があつたことは、慧皎の「名僧」と「高僧」との分析とも全く無關係であつたとはいきれないものがあることを記憶せねばならない。

道宣の慧皎傳には、高僧傳が文義明約で當代に崇重されたことを記したあと、「後、終るところを知らず」としているが、これは現行の高僧傳によつて、慧皎の晩年についての重要な補遺が附されていることを見れば、道宣所見の高僧傳は、別本の系統に屬するものであつたことが推察される⁽⁷⁾。その補遺（あるいは追記）の全文は注記のとおりであるが、文中に、梁末の元帝承聖二年（五五三）に侯景の難を避けて江西の潁城にいたり、しばらく講説していたが翌承聖三年甲戌の歲二月、俗壽五十八歳で入寂したといふのである⁽⁸⁾。太清元年（五四七）に北魏の降將侯景（五五二）を梁の武帝が納めたことは、結局は梁王朝を亡す源となつたことはいふまでもない。一時は河南方面の軍事を統監せしめられた侯景は、東魏の將慕容紹宗に攻められて大敗し壽春に逃れたが、ようやく梁朝における我が身の危険を感じ、かつ梁と東魏の間に和睦の議がおころうとするに及んで、壽春で武帝に叛いた。揚子江を渡り梁の首都建康を圍み、いつたんは和したが再び叛し、ついに武帝は八十六歳の高齡をもつて臺城に幽憤のうちに崩ずることがあつた。ときに太清三年（五四九）五月である。侯景は武帝の第三子簡文帝蕭綱を擁立して、權を專らにしたが、自ら宇宙大將軍を稱するにいたつて、帝を幽閉し、ついに帝を土囊をもつて壓殺したのは太寶二年（五五二）。こののち江陵にあつた湘東王暉が即位して元帝となるのである。慧皎が侯景の難を避けて潁城にいたつたのは承聖二年（五五三）であるとするが、實は侯景が元帝の將王僧辯や廣東から北上してきた陳霸先の軍に敗れて嘉興に奔り、ついに擒えられ、船中に刺殺されたのは承聖元年（五五二）四月である。慧皎が江西に難を避けたのは、おそらくは侯景が宇宙大將軍と稱した太寶二年の十二月に、浙江の若耶山に盜となつていた張彪が義軍をおこして侯景の部下上虞の太守蔡臺樂らと戦い、諸暨・永興

の諸縣に勢を伸張したため、兵火が嘉祥寺一帯に及ぶことを避けんとしたのである。かくてかねて交渉のあつた江陵湘東王繹すなわち元帝をたよつて、おそらくは錢塘江を溯つて益城の地にいたり、江陵の地も安住の地でないことを知り、此の地でしばし講説布教ののち、承聖三年二月入寂したのである。

江州僧正慧恭が首となつて喪事をつかさどり、廬山禪閣寺に葬つた。龍光寺(建康)の僧果が難を避けて廬山にあり、見聞したことを書き記したという。筆者僧果が慧皎と同時代人であることは察せられる。梁の武帝の全盛時に講經蒐書にその名を知られた慧皎の晩年は、梁王朝とその盛衰をともにしたものである。

二 高僧傳以前の僧傳應驗記類

現存する最古の中國高僧傳としての慧皎の高僧傳が依據した諸資料類は、僧祐の出三藏記集や寶唱の名僧傳をはじめとして、高僧傳卷十四所收の著者慧皎の自序に示すもの、王曼穎の慧皎への返信に示すものをふくめて、實に二十數種を數えるのである。これらの一々について略述する。これは慧皎以前の僧傳類を知ることによつて、南北朝中期以前に、外來佛教が中國人社會にどのような形式でうけとめられたかの具體的な解答を得るための重要な足がかりともなるのである。

佛教初傳の後漢から西晉・東晉・宋・齊・梁にいたる六代五百年になんとなする間、中國人沙門の卓越した人材は輩出し、それらの活動の跡を記した記録は衆く、記載の方法はそれぞれ異なるものがあるとして、慧皎が見聞した記録と、それに對する慧皎の短評と撰述成つた高僧傳を送られた王曼穎の意見は次のごとくである。

一、高逸沙門傳 一卷 竺法濟撰

梁高僧傳卷四、竺潛(竺法深)傳に「潛の神足の弟子竺法濟は幼にして才藻あり、高逸沙門傳を作る」と記すもの。師の竺潛は東晉の丞相武昌郡公主敦(二六―三三)の弟であり名族瑯琊の王氏の出自で王導・庾元規などがその風徳を欽んで友として

敬したと伝えられ、^⑩そうした雰圍氣の中で生長した竺法濟が高逸沙門傳を撰述したことは、老莊を釋し方等大乘の教を暢かにした當代の僧風を知ることができる。歷代三寶紀卷八に「高逸沙門傳一卷、孝武帝世、剡東岬山沙門竺法濟」と錄するもの。すでに早く散佚しているが、高逸の名にふさわしく、劉孝標（名は峻、四六二—五二二）の世說新語卷上之上の言語第二には、劉惔が竺法深に道人（僧侶）の身でどうして朱門に出入するかの質問をしたのに對して、貴方は朱門と見るが、私には朱門も粗末な蓬の戸も同じことだと答えるところがあるが、その注に高逸沙門傳を引用してこれをうらづけている。^⑪

二、僧傳 五卷 法安撰

梁高僧傳卷八、齊京師中興寺法安（四五四—四九八）は、魏の司隸校尉畢軌の後裔という。南齊の永明中（四八三—四九三）に都で涅槃・維摩・十地・成實論を講じ、司徒文宣王をはじめ張融・何胤らが文義に裏服したと傳へ、建業の東寺で淨名經や十地經の義疏ならびに僧傳五卷を著すというものである。その内容は、皎序には「沙門法安但列志節一行」といい、王曼穎は「法安止命志節之科」という。高潔貞節の僧を列傳したもののようであり、慧皎にとつては好ましいものであつたろう。ただ志節の一科と記すところに、僧傳としての普遍性のないことを憾むことをいつている。

三、遊方（傳） 僧寶撰

皎序に「沙門僧寶止命遊方一科」といい、王曼穎が「僧寶偏綴遊方之士」という。天竺に遊んだ僧の傳記を記したものであるが、撰者僧寶については梁高僧傳卷八中には同名が三人もあり、その誰に該當するかは未詳である。^⑫

四、（江東名德傳） 法進撰

皎序に「法門法進逌通撰論傳、而辭事闕略、並皆互有繁簡、出沒成異、考之行事、未見其歸」というもの。隋書經籍志に江東名德傳三卷法進撰とするものがあり、慧皎のいう論傳を通撰したというものであろう。梁高僧傳に法進の名は見えるが、この法進が著者と斷定し得る記事は見當らない。王曼穎の批評に、法進の「江東名德傳」が名博にして未だ廣からずとするのは、王曼穎自身の、その江東という名にもかかわらず必ずしも網羅していないという讀後感から生じたものであろう。

五、宣驗記 三十卷 臨川康王劉義慶撰

六、幽明錄 二十卷

世說新語の著者、宋の劉義慶（四〇三—四四四）の、おそらくは宮廷をめぐる文人たちの共同編著になるものと思われる宣驗記三十卷・幽明錄二十卷（唐書藝文志は三十卷）はともに今日では散佚して世説注・法苑珠林・太平廣記・太平御覽その他に散見するものを蒐録した魯迅の古小説鈎沈所收の兩書に、その大體を窺い得る。その書名からも察せられるように、兩書ともに六朝中末期にさかえた應驗記の類であり後述の冥祥記・益部寺記・京師塔寺記・感應傳・徵應傳・陶淵明の搜神錄にいたるまでをふくめて「諸僧を傍出して、その風素を叙べているが、みな附見であり、はなはだ疎闕多し」と評してはいるが、しかもこれらの中に、慧皎の僧傳編修の一面を知るものが見られる。卷一康僧會傳に見る孫皓の記載は注目すべきものである。吳主孫皓が佛教を敬信せず、四月八日佛誕日に佛像を厠所におき「汝のために灌頂せん」といつて、尿をかけるの不遜のことがあり、その應報として陰囊たちまち腫れ、疼痛高熱、搦うべからずという慘狀を呈し、夜より朝にかけて苦痛のあまり、死を求めるといった有様であつた。常に佛を敬信していた寵姫の方便によつて前罪を悔い、香湯をもつて佛像を洗い、殿上に安置して叩頭悔過したので、痛みも去り、腫れもひいていつた。そこでただちに康僧會について五戒を授けられ、大市寺において衆僧を供養した（辯正論卷八の注所引の宣驗記）、とあるものを、慧皎は康僧傳では四月八日佛誕日などのまことしやかなこじつけを刪去して、文辭を修飾したものと改めている。また孫皓と康僧會が佛教にいう善惡報應を論じて、易に「積善餘慶」といい、詩に「求福不回」という儒典の格言も、そのまま佛教の明訓であると康僧會が答えたところ、孫皓は、そのとおりであれば、先に周孔の説きあかしたところを、なにも佛教の明訓をもちいる必要もないではないかと反論した。康僧會は、周孔のいうところはその言は簡略で卑近な現世のことを示すにとどまる、それに反して釋迦の教は周到に幽微の點をつくしている、惡を行えば地獄の長苦があり、善を修すれば天宮に生ずるという永い楽しみがあると答えている。この周孔・釋教の對比、因果應報、地獄・天宮のことは、いずれも宣驗記か、幽明錄にもとづいたものであらうが、慧皎が「疎闕はなはだ多し」としながら、しか

も初期中國佛教の本質をつく議論の根據となつてゐることは注目すべきである。⁽¹³⁾

七、冥祥記 十卷 王琰撰

法苑珠林卷十四には冥祥記自序を掲げており、⁽¹⁴⁾彼が幼稚の時、交趾において五戒を授けられ、觀音金像を與えて供養するよう*に*いわれた。その金像をもたらし、揚都南潤寺に寄託したのであるが、最近に觀音像の應驗のあつたのが建元元年（四七九）であるという。このことから觀音應驗靈感について記し、この冥祥記を綴り成したという。よつてもつて、王琰の冥祥記著作の沿由、年代などを知り得るのである。これも魯迅によつて整理されていて、宋・齊・梁間の知識人の眞摯な觀音信仰を知ることができるし、その佛教信仰受容の純眞さをもうかがい得るのである。

八、益部寺記 劉俊撰

彭城の劉俊撰というから、南齊書卷三十七に專傳のある、鑄錢に獨特の施策を進めた劉俊をさすのであらうが、益州府州の事を行なうというが、その傳には益部寺記著作のことは記さない。益部の佛寺や住侶について記したものであらう。⁽¹⁵⁾

九、京師寺記 二卷 曇宗撰

高僧傳卷十三、宋靈味寺釋曇宗傳には、わかくして學を好み博く衆典に通じ、唱説の功、當世に獨歩すという。宋の孝武帝の歸信を得、帝の寵愛する殷叔儀が死ぬと、三七日の法會を設けて菩提をとむらつたという。京師塔寺記二卷を撰したことを記している。高僧傳卷一、安清傳には、曇宗の塔寺記云として、「丹陽の瓦官寺は晉の哀帝の時沙門慧力の立つるところで、後に沙門安世高が邦亭廟の餘物をもつてこれを治めた」としている。隋書經籍志には曇景作としているのは曇宗の譌字であることはいふまでもない。宋都の佛寺を中心としたものであるだけに、僧傳は傍出の域を出ないものであつた。

十、感應傳 王延秀撰

東晉の末期に尙書郎となり、宋の泰始中に祠部郎となつた太原の王延秀の撰述になる感應傳八卷は、隋書經籍志・唐書藝文志などに著録されている。唐志では子部小説の顔に入つてゐることは、歴史の史料としての價值に疑問を提起しているもので

ある。

十一、徵應傳 朱君臺撰

唐の濟法寺沙門法琳（五七二—六四〇）の破邪論卷下には、吳興朱君臺撰徵應傳と見えるし、唐書藝文志には撰者名を缺いた徵應集二卷が録されている。

十二、搜神錄 陶淵明撰

世に搜神後記十卷として周知されるもの。神怪の小説集であり、とくに佛教史僧傳の資料としてこたえるものはすくなく、今日では陶潛字淵明の眞撰を信ずるものもない。高僧傳卷十、晉上虞龍山史宗傳に、「陶淵明記に、白土塢で三異法師に遇うというその中の一法師がこれ（史宗）である」とするのは、この搜神錄を指すものである。

以上の五から十二にいたる八書が慧皎によつて、傍出諸僧、叙其風素、而皆是附見、亟多疎闕と評されるものである。しかも、これらの中に記された諸僧の行狀、諸人の眞摯な信佛の中に、當時の中國人社會の中に受容された中國佛教の本質といったものを看取できることを知るべきである。後の圖表によつても知られるように、魯迅の古小説鈎沈の中の拾佚の冥祥記のみをとりあげても、高僧傳の資料となつたものは三十件を数えるのである。まして、完全な冥祥記の原本があつて對比し得るとすれば、まだ／＼多數の資料が摘出される可能性を持つてゐるのである。亟多疎闕として批難するにあたらないことは、撰述者慧皎自身がもつともよく認識していたにちがいない。しかも敢てこれらの言をなすことは、解しがたいことといわねばならない。

十三、三寶紀傳 竟陵文宣王撰

南齊武帝の第二子、蕭子良（四六〇—四九四）字は雲英、六朝貴人の中でも最も敬虔な篤信者として知られる。南齊書卷四十、武十七王にその傳がある。「また文惠太子とともに釋氏を好み甚だ相い友悌あり、子良は敬信尤も篤し、しば／＼邸園に齋戒を營み、大いに朝臣衆僧を集めて、食を賦り水を行ない、あるいは躬らその事を親しくするにいたる、世や／＼おもえらく宰相

の體を失なう」と評せられたほどである。定林寺の僧祐に請うて律部を講ぜしめ、聽衆常に七八百人と稱せられたと高僧傳卷十一僧祐傳に傳えるのも、佛教史家としての僧祐との深い交渉を示すものである。「著すところの内(佛教)外(世俗)の文筆數十卷あり、文采無しといえども多くは勸戒なり」といわれるほど、日常生活に佛教を導いた彼の著書中に、三寶紀傳の名は見えないが、慧皎の序に「或稱佛史或號僧史」と稱するように、おそらくは當代の佛法僧三寶の歴史を記したものであろう。歷代三寶紀卷十一にも、佛史法傳僧錄の別稱のあつたことを傳え、道宣の大唐内典錄にもこれを承けている。慧皎がこの書を、「佛法僧の三寶をとくに叙しており、辭旨相いかゝわり、混濫して求めがたく、さらに蕪味たり」と酷評しているのは、律を宗とした慧皎の生活體驗から出たものである。

十四、僧史 王巾撰

歷代三寶紀卷十一に、齊僧史十卷、司徒竟陵文宣王府記室王巾撰とするもの。竟陵文宣王の記室としておそらくはその著作活動にも參與したが、慧皎はこの書を、「意は該綜に似るも文體いまだ足らず」と評している。文宣王の三寶紀傳が佛法僧にわたるのに對して、これは齊僧史の名の示すとおり、僧傳であり、高僧傳中にみる數多くの文宣王をめぐる僧侶の傳記はこれによつてゐるものとみられる。

十五、出三藏記集 僧祐撰

道安の綜理衆經目錄を發展させた經錄であり、撰者、梁の僧祐(四四五—五一八)は慧皎とは五十二歳もの年長者であるから、高僧傳は僧祐の死後の編纂であらう。慧皎はこの律部の大先輩の著書にも、「たゞ三十餘僧あり、無きところ甚だ衆し」と評するが、もと／＼出三藏記集は譯經目錄をめざしたものであり、この書に見える三十二人附見數人の僧傳もおゝくは譯經を中心としたものであり、慧皎自身、高僧傳に收載したこれらの僧の傳記はほとんどが出三藏記集に依つてゐるのである。齊・梁代の代表的な文人劉勰が幼くして兩親を失い、志を篤くして學を好んだが、家の貧なるため婚娶できず、沙門僧祐を頼つて寺内にともに住み、十餘年を経て博く經論に通じたことは周知の事實である。儒家の圖書分類をまねて佛經論疏類の分類を試み、

定林寺の經藏について新しい藏經排列の基準を示したことは、齊・梁代における内外の學の交渉を考えるうえの重要な事件である。具體的な分析を必要とするが、僧祐の編著である出三藏記集・釋迦譜・弘明集などに、劉勰の積極的な參與があつたと信ぜられる。梁書に、「京師の寺塔及び名僧の誌碑には必ず勰に請うて文を製せしむ」ということから、僧祐の著述に劉勰の關與乃至は代作の可能性が思料されるのである。⁽¹⁶⁾

十六、東山僧傳 郗景興撰

晉の中書郎郗超(二三六—三七七)字は景興の撰述する東山僧傳は他には著録するものが見あたらない。浙江會稽剡東の諸山に住む僧の傳記である。支遁・于法開・于道邃・道安・竺法汰・竺法曠・慧嚴などのはばひろい交友があり、自らも奉法要(弘明集十三)のような在俗の佛教信者である知識人による佛教概論を著わした郗超の僧傳は、慧皎にとつてはこの地方の佛教界の活動を知る上の資料となつた。十七の廬山僧傳、十八の沙門傳の三部をふくめて、慧皎が、おのおの競うて一方を擧げ、古今に通ぜず、つとめて一善を存するも餘行に及ばずというのは、あまりにもきびしい批評である。しかし王曼穎は東山僧傳について、たまたま居山の僧を採つていてその間選擇のなかつたことを指摘している。

十七、廬山僧傳 張孝秀撰

梁書卷五十一の傳によれば張孝秀は江西南陽の人、わかくして州に仕えて治中從事史となつたが母の死にあつて喪に服し、おわつてから建安王の別駕となつたが間もなく職を去つて故山に歸り、廬山の東林寺に居た。所有する數十頃の田、數百人の部曲をもつてつとめて耕作にあたり、その得るところごとくを廬山の僧衆に供した。しかも自らはきわめて質素な生活をして群書を博渉しとくに佛典に詳しかつたという。廬山僧傳の名は慧皎が擧げ、王曼穎によつて、張孝秀は筆はとつたが、郗超が得たと同じ諂、すなわちたま／＼住みあわせた土地での選擇なき取材採録を批判されたのである。

十八、沙門傳 陸明霞撰

陸明霞、名は杲(四五九—五三二)、吳郡の名家の出で、もとより佛法を信じ持戒甚だ精しと梁書卷二十六の傳に記されている。

性は倅直忌憚するところなく、司法の職については權幸をも避けずと評された陸杲の日常は嚴格をきわめた。しかも沙門傳三十卷を撰述するだけの佛教界に對する博識をも兼ねていたのである。六朝時代佛教信仰の主流をなした觀音信仰の靈驗記である繫觀世音應驗記六十九條を撰して傳亮・張演の觀世音應驗記に繫いだのは南齊最後の年、中興元年（五〇二）であり、時に司徒從事中郎の職にあり、四十三歳の壯年であつた。沙門傳三十卷の撰述の年時は不詳であり、その撰述が事實であるとすれば、繫觀世音應驗記よりも後の著述であらう。大唐內典錄卷十には、慧皎の高僧傳を列した次に、梁著作中書監裴子野撰沙門傳三十卷、其十卷劉瑒續とあり、さらに梁外兵郎劉瑒奉勅撰揚都寺記一十卷を擧げている。裴子野（四六九—五三〇）は著名な歷史學者裴松之の曾孫にあたり、著書も多いが、梁書卷三十の傳によれば勅命によつて衆僧傳二十卷を撰したと傳える。道宣はその慧皎傳において、江表に多く裴子野の高僧傳一帙十卷が行なわれているが、その文は極めて省約、未だ通鑒するに足らずと評している。陸杲の沙門傳三十卷は、この裴子野の沙門傳との混淆、誤解があるのではなからうか、疑問をのこしておくものである。

慧皎の高僧傳執筆の直接の動機はいうまでもなく、寶唱の名僧傳の缺を改めんとしたものであることはいうまでもない。そして、名僧傳を除いた如上の慧皎自序の中に示された十八種の資料について若干の論述を試みたのであるが、これらの外に、慧皎がふれずに、王曼穎が慧皎への返簡の中に示すもので、いわゆる別傳の類が若干見られる。隋書經籍志考證卷十三には、世説に引用された別傳六十九種を擧げていることは古來注目されているものであるが、王曼穎は、康泓の單道開傳・王秀の高座別傳⁽¹⁷⁾・張辯の僧瑜傳贊・周顒撰の玄暢碑文を擧げている⁽¹⁸⁾。もとよりこのような別傳碑文の類は慧皎の高僧傳中にも他にも多く引用されていて、これのみにとどまるものではない。とくに著書として擧げる必要もないものである。しかしこれらの片記孤文の堆積がついに慧皎の高僧傳の成立にまでつながることは否み得ない事實である。

三 名僧傳と高僧傳

以上のような数多くの僧傳寺傳應驗記の類とか、稗史野乘の類など、慧皎が自序にいうがごとく、宣驗記・幽明錄・冥祥記・感應傳・徵應傳・搜神錄等にいたる雜錄數十餘家及び晉宋齊梁各朝の春秋史書、隋書經籍志によれば晉書だけでも王隱・虞預・朱鳳・謝靈運・蕭子雲・沈約の各家のものがあつた、また向法盛の晉中興書・習鑿齒の漢晉陽秋・孫盛の晉陽秋その他、宋書にしても徐爰の宋書をはじめ孫嚴・沈約所編のもの、その他齊・梁の國史にかゝわるもの。また秦趙燕燕涼荒朝僞曆という北方胡族國家の史書、たとえば高僧傳卷九、佛圖澄傳に引く田融の趙記とかの類。地理雜篇、高僧傳卷三、宋六合山釋寶雲傳にいう「其遊履外國、別有記傳」とするような天竺旅行記、曇無竭の歷國傳記、庾仲雍の荊州記などの類。孤文片記、さきに述べた別傳・傳贊・別記とか、劉勰が作つた僧祐碑文・何胤が作つた慧基の碑文、あるいは傳文中に引用されているような、孫綽の道賢論・正像論・明德沙門論・慧琳の白黑論・宗炳の難白黑論の類。また慧皎が直接間接に故老から傳聞したことがら。そのようなものが高僧傳編纂の資料となつてゐることはあきらかであり、慧皎の藏書が梁の元帝蕭繹の有に歸するものもきわめて當然なほど、多くの資料が記述のために蒐集されたのである。それにもかゝわらず、寶唱の名僧傳がもつとも大きく、慧皎の著作に影響力を與えていることに注目しなければならない。

寶唱の名僧傳三十卷は、梁の武帝天監九年（五一〇）より筆を起し、天監十三年（五一四）に條列に就いたというから、前後五年をついやしてようやく成つた。名僧傳については他に成稿を發表することになつてゐるため、今は重複は避けるが、續高僧傳の寶唱傳に記された名僧傳の自序・後序によつて編纂の過程を知り得る。慧皎は三十歳ほどへだつた僧界の大先輩に對してかたくなほどに、名を排して高を立てることを強調してゐる。慧皎の自序に、

前代より撰するところ、多く名僧という。然も名はもと實の資なり、若し實に行なうも光を潛むれば則ち高なれども名あ

らず。徳寡きも時に適えば則ち名あれども高ならず。名ありて高ならざるはもとより紀するところにあらず。高なれども名あらざるは則ち今録に備う。故に名の音を省きて代うるに高の字をもつてす。その間、草創なればあるいは遺逸あらんか。⁽¹⁹⁾

という。「多く名僧という」と記すが、名僧の名を冠した僧傳は慧皎より十年以前に撰述された三十卷の規模を持つ本格的な僧傳―名僧傳を除いては、法進の江東名徳傳があるのみであり、慧皎が直接に名僧傳を意識していたことは、自序の中に、從來の僧傳の缺點を擧げて、きびしい批判をしているがさらに次の數句によつてもその眞意が知られる。

おのおの一方を擧げて、今古に通ぜず、一善を存するに努めて、餘行に及ばず、即時に逮んでまた繼ぐに作者あり、然れどもあるいは褒贊のもと、あい揄揚するに過ぎ(僧傳類への批評)あるいは、事を叙するの中に空しく辭費を列ね、これが實理を求むるに的として稱すべきものなし(名僧傳への批評)、

とのてきびしい批判を下していることは、⁽²⁰⁾ いちめん青年史家慧皎の意氣ごみをも推察させるものがある。名と高の區別や、的として稱すべきものなしなどという慧皎の見解はともかくとして、現實には、慧皎は寶唱の名僧傳を意識し對抗して、己の高僧傳を擧げることにつとめた。しかし附表に見られるように、名僧傳はさいわいに今日に残された日本の笠置宗性の抄寫した名僧傳指示抄に記された目録によれば三十卷四百二十五人、梁高僧傳は十三卷二百五十七人と、人數においては若干のへだたりはある。名僧傳に專傳とするものを高僧傳において附見の中に入れるものもあり、一概に數の多少で云云することはできないし、この二百五十七人の中に、名僧傳にないものは三十數人に過ぎない。上述のとおり、道宣は慧皎傳において、「寶唱の撰した名僧傳はすこぶる浮沈多きをもつて、よつて遂に例を開きて廣を成し(八科を十科にひろげる)て高僧傳十四卷を著した」というのであるが、やはり一代の佛教史家として、また永く宮廷の藏書をも自由に利用し得る地位にもあつた寶唱の名僧傳撰述は、資料的にも豊富で手堅いものがあつたことは、事實として認めなければならないのである。

また慧皎が、「諸僧を傍出しその風素を叙ぶるも皆附見にして亟ば疎闕多し」とした應驗記の類も、高僧傳において文辭は

修飾されているが、その事蹟は多く語りつがれていて、たとへば冥祥記の場合をみても、さきにふれたように、附表を一見すれば、これらも高僧傳の成立には重要な役割を果しているのである。その冥祥記などの應驗記にもとづいた高僧傳の列傳の究明は、中國人の理解し受容した初期中國佛教の本質につらなるものであることはいうまでもない。後篇においてさらに深く掘りさげて論述したい。

四 高僧傳目錄對照表

大正大藏經(第五十卷)本高僧傳序錄によつて、高僧傳の列傳者の名を録し、名僧傳・出三藏記集・冥祥記・幽明錄・宣驗記・觀世音應驗記などに著録されているものゝ所在をあきらかにした。名僧傳・出三藏記集については山内晋卿氏がすでに五十餘年前に試みられたが、それを参照しつつさらに進めたものである。これによつて、慧皎の高僧傳の列傳が神怪・小説のたぐいまでをもふくめて、どのような系列で記述・増添されていたかの過程をも知ることができるのである。

名僧傳は春日禮智氏の報告による笠置宗性自筆本の目錄、出三藏記集は大正大藏經本によつた。名僧傳の項に1-1とあるのは第一卷の第一であることを示す。出三藏記集の場合もこれに準ずる。冥祥記などは魯迅全集重印本である一九五一年北京重印第一版の古小説鈎沈によつた。たとえば開卷第一の攝摩騰の冥祥記は同書三七五頁記載の冥祥記であることを示す。また觀世音應驗記類については牧田著六朝古逸觀世音應驗記の研究の頁數を示す。

高僧傳第一卷 <small>譯經上 十五人</small>		名僧傳		出三藏記集		其他	
1、漢雒陽白馬寺攝摩騰	1-1	冥	375				
2、漢雒陽白馬寺竺法蘭	1-2	幽	277				
3、漢雒陽安清	1-4	幽	274				
4、漢雒陽支樓迦讖	1-3	幽	13-2				
		名僧傳		出三藏記集		其他	
		1-5	宣	13-4	367		
		1-6	宣	13-7			

- 9、晉長安帛遠 帛法祚 衛士度
- 10、晉建康建初寺帛尸梨蜜
- 11、晉長安僧伽跋澄 佛圖羅刹
- 12、晉長安曇摩難提 趙正
- 13、晉廬山僧伽提婆 僧伽羅叉
- 14、晉長安竺佛念
- 15、晉江陵辛寺曇摩耶舍 竺法度
- 16、晉長安鳩摩羅什 譯經中 七人
- 17、晉長安弗若多羅
- 18、晉長安曇摩流支
- 19、晉壽春石磣寺卑摩羅叉
- 20、晉長安佛陀耶舍
- 21、晉京師道場寺佛駄跋陀羅 安陽侯 道晉 法盛 法經 僧表
- 22、晉河西曇無讖 法盛 法經 僧表
- 23、宋江陵辛寺釋法顯 譯經下 十三人
- 24、宋黃龍釋曇無竭
- 25、宋建康龍光寺佛駄什
- 26、宋河西浮陀跋摩

26	26		24 _{層表}	26 _{密法維}	2	19	2	18	18	19	2		19	26	3	3	3	1	8 _{帛法祖}	8
8	2		4	3	3	5	1	1	2	1	2		6	1	1	2	3	7	7	2
15	15		14 _{安陽侯}	14	14	14				14			15	13	13	13	13		15	
10	6		9	3	4	2				1			5	12	11	10	9		1	
冥																				

424

27、宋京師積園寺釋智嚴	28、宋六合山釋寶雲	29、宋京師祇洹寺求那跋摩	30、宋京師奉誠寺僧伽跋摩	31、宋上定林寺曇摩蜜多	32、宋京兆釋智猛	33、宋京師道林寺薑良耶舍 <small>僧伽達多 僧伽羅多</small>	34、宋京師中興寺求那跋陀羅 <small>阿那摩低</small>	35、齊建康正觀寺求那毘地 <small>僧伽婆羅</small>	高僧傳第四卷 <small>義解一 十四人</small>	36、晉洛陽朱士行 <small>竺叔蘭 無羅叉</small>	37、晉淮陽支孝龍	38、晉豫章山康僧淵 <small>康法暢 支敏度</small>	39、晉高邑竺法雅 <small>曇浮 曇智 曇相</small>	40、晉中山康法朗 <small>令韶</small>	41、晉檉煌竺法乘 <small>竺法行 竺法存</small>	42、晉剡東仰山竺法潛 <small>竺法友 竺法繼 康法識</small>	43、晉剡沃洲山支遁 <small>支法度 竺法仰</small>
--------------	------------	---------------	---------------	--------------	-----------	---	---------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	-------------------------------------	-----------	--	--	--------------------------------	-------------------------------------	---	--------------------------------------

8 5	溫 8 12	友 8 10	8 3	6 4	6 7	11 1	1 8	11 2		5 1			3 6	19 10	羅多 19 8	連多 19 9	26 7	19 7	3 5	3 4	26 6	26 5	
										竺叔蘭 13 8	13 5		14 10	14 8			15 9	14 7	14 6	14 5	15 8	15 7	
冥					冥					冥											冥		
402					385					376											416		

高僧傳の成立（上）

一一七

93、宋吳虎丘山釋曇諦	92、宋江陵琵琶寺釋僧徹 僧莊	91、宋京師靈味寺釋僧舍 道舍	90、宋淮南中寺釋曇無成 曇阿	89、宋廬山凌雲寺釋慧安	88、宋江陵辛寺釋曇鑒 道海 慧鑑 慧恭 曇泓 道廣 道光	87、宋餘杭方顯寺釋僧詮	86、宋京師祇洹寺釋僧苞 法和	85、宋東阿釋慧靜	84、宋京師彭城寺釋僧彌	83、宋京師彭城寺釋道淵 慧琳	82、宋京師祇洹寺釋慧義 僧睿	81、宋京師道場寺釋慧觀 僧瓌 法榮	80、宋京師東安寺釋慧嚴 法智	79、宋京師烏衣寺釋慧叡	77、宋京師烏衣寺釋慧叡
-------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------	-------------------------------------	--------------	--------------------	-----------	--------------	--------------------	--------------------	-----------------------	--------------------	--------------	--------------

14 1	14 13	14 4	25 7	24 10	7 2	27 4	13 2	7 5	13 4	13 3	琳 22 6	睿 14 2	13 8	7 4	13 7	智 16 7	13 6	13 5	寶 16 8
---------	----------	---------	---------	----------	--------	---------	---------	--------	---------	---------	--------------	--------------	---------	--------	---------	--------------	---------	---------	--------------

冥	觀	冥	冥
428	39	416	452

107、宋吳與小山釋法瑤 曇瑤	106、宋山陰靈嘉寺釋超進 曇機 道慈	105、宋京師興皇寺釋道猛 道堅 慧觀 慧敷 道訓 道明	104、宋京師靈根寺釋僧瑾 曇度 玄運	103、宋下定林寺釋僧鏡 曇隆	102、宋京師何園寺釋慧亮	101、宋京師中興寺釋曇斌 曇濟 曇宗	100、宋京師中興寺釋道溫 僧慶 慧定 慧嵩	99、宋丹陽釋梵敏 僧需	98、宋京師北多寶寺釋道亮 靜林 慧隆	97、宋長沙麓山釋法愍 僧宗	96、宋山陰天柱山釋慧靜	95、宋蜀武擔寺釋道汪 普明 道闇	94、宋壽春石磻寺釋僧導 僧因 僧音 僧威
--------------------	------------------------	------------------------------------	------------------------	--------------------	---------------	------------------------	------------------------------	-----------------	------------------------	-------------------	--------------	----------------------	--------------------------

7 7	15 8	運 22 17	16 2	10 13	16 4	濟 16 5	16 3	定 14 7	慶 16 10	14 16	簫 7 8	14 15	林 14 11	14 18	宗 10 2	10 6	15 4	闇 13 9	明 22 2	22 3	14 20
--------	---------	---------------	---------	----------	---------	--------------	---------	--------------	---------------	----------	-------------	----------	---------------	----------	--------------	---------	---------	--------------	--------------	---------	----------

冥	觀
443	48

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|--|--|--|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 7 | 常 | | | 鮮 | | | | 實 | 達 | 最 | 表 | 遷 | | 達 | 趣 | | | 登 | 記 | | | | | 世 | 整 | | 疊 |
| 17 | 17 | 17 | 17 | 17 | | | | 17 | 17 | 17 | 17 | 17 | 17 | 17 | 17 | 17 | 17 | 17 | 17 | 17 | 17 | 17 | 16 | 15 | 14 | 15 | 15 |
| 9 | 35 | 20 | 13 | 7 | | | | 6 | 38 | 37 | 26 | 19 | 18 | 17 | 32 | 28 | 3 | 1 | 33 | 30 | 2 | | 6 | 9 | 9 | 7 | 3 |

- # 高僧傳の成立（上）

135、	梁京師招提寺釋慧集	
136、	梁剎法華臺曇斐	法藏 明慶
	高僧傳第九卷	神異上 四人
137、	晉鄴中竺佛圖澄	道進
138、	晉羅浮山單道開	
139、	晉常山竺佛調	
140、	晉洛陽耆域	
	高僧傳第十卷	神異下 十六人
141、	晉洛陽盤錫山撻陀勒	
142、	晉洛陽婁至山訶羅竭	
143、	晉襄陽竺法慧	范材
144、	晉洛陽大市寺安慧則	慧持
145、	晉長安涉公	
146、	晉西平釋曇霍	
147、	晉上虞龍山史宗	
148、	宋京師杯度	
149、	宋僞魏長安釋曇始	
150、	宋高昌釋法朗	智整
151、	宋峨山通雲山邵頌	
152、	宋江陵琵琶寺釋慧安	僧覺 法衛
153、	齊京師枳園寺沙彌釋法置	法楷
154、	齊荊州釋僧慧	慧遠

21	21	21	21	21	21	21	進	4
15	12	9	10	6	5	2	6	1
							3	

				冥	冥	冥	冥	幽
				384	381	383	415	222

173、	宋蜀安樂寺釋普恒	
172、	宋成都釋道法	
171、	宋荊州長沙寺釋法期	道果
170、	宋京師中興寺釋慧覺	
169、	宋廣漢釋法成	
168、	宋始豐瀑布山釋僧從	
167、	宋餘杭釋淨度	
166、	宋長安太后寺釋慧通	
165、	宋長安寒山釋僧周	僧亮
164、	晉僞魏平城釋玄高	慧崇
163、	晉蜀石室山釋法緒	
162、	晉始豐赤城山支曇蘭	
161、	晉廣漢閭興寺釋賢護	
160、	晉長安釋慧毘	
159、	晉始豐赤城山竺曇猷	慧開 慧真
158、	晉剎隱岳山帛僧光	
157、	晉江左僧顯	
	習禪 二十一人	
	高僧傳第十一卷	習禪 二十一人 明律 十三人
156、	梁京師釋保誌	道香 僧朗
155、	齊壽春釋慧通	

20	24	20	20	20	25	20	20	24	6	20	23	20	20	23		21	遠
24	14	21	17	11	6	8	7	3	10	6	8	3	2	2		14	21
																	13

188、齊蜀靈建寺釋法琳

高僧傳の成立（上）

18	文	18	度	25	18		具	18	18	18	遠	18	14	18	光	18	18	18		11	20	隱	20	謙	20	20	20
16	18	15	14	23	11		10	8	6		9	14	5		7	4	3		21	29	26	19		25		27	

204、晉山陰顯義寺竺法純

$$\begin{array}{c} 23 \\ | \\ 14 \end{array}$$

冥

409

205、晉蜀三賢寺釋僧生	206、宋剡法華臺釋法宗	207、宋京師南潤寺釋道閑	208、宋廬山釋慧慶	209、宋臨淄釋普明	210、宋京師道場寺釋法莊	211、宋京師瓦官寺釋慧果	212、宋京師東安寺釋法恭 僧恭	213、宋京師彭城寺釋僧覆 (慧琳)	214、齊京師高座寺釋慧進 僧念	215、齊永興栢林寺釋弘明	216、齊京師靈根寺釋慧豫 法音(普)	217、齊上定林寺釋道嵩	218、齊上定林寺釋超辯 法明 僧志 法定	219、齊山陰天柱山釋法慧 曼遊	220、齊京師後岡釋僧侯 慧溫	221、梁上定林寺釋慧彌 法仙	222、梁富陽齊堅寺釋道琳
--------------	--------------	---------------	------------	------------	---------------	---------------	---------------------	-----------------------	---------------------	---------------	------------------------	--------------	--------------------------	---------------------	--------------------	--------------------	---------------

25	23	23	23	22	23	25	25	25	25	25	22	18	25	25	25	22	22
8	17	17	19	4	20	5	1	13	22	22	14	17	26	28	29	35	8

冥	冥
456	425 437

240、宋京師白馬寺釋僧饒	239、宋京師祇洹寺釋法平	238、晉京師建初寺支曇籥	237、晉中山帛法橋	236、梁京師正覺寺釋法悅	235、梁剡石城山釋僧護	234、齊上定林寺釋法獻 玄暢	233、齊南海藏微山釋法獻	232、齊南海雲峯寺釋慧敬	231、宋京師延賢寺釋法意	230、宋京師釋僧亮	229、宋豫州釋僧洪	228、宋山陰法華山釋僧翼	227、宋京師崇明寺釋僧慧	226、晉京師安樂寺釋慧受	225、晉京師瓦官寺釋慧力	224、晉武陵平山釋慧元 竺慧直	223、晉并州竺慧達	興福 十四人	高僧傳第十三卷 興釋十四人 經師十一人 導師十人
---------------	---------------	---------------	------------	---------------	--------------	--------------------	---------------	---------------	---------------	------------	------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------------	------------	--------	--------------------------------

30	30	30	23			暢	28	28	28	27	27		28	28	28	28	28		
6	2	1	3			16	20	21	12	7	3		1	2	3	5			

光世音	冥	冥	冥
2	35	457	406

- 241、宋安樂寺釋道慧
- 242、宋謝寺釋智宗
- 243、齊烏衣寺釋曇遷
- 244、齊東安寺釋曇智
- 245、齊安樂寺釋僧辯
- 246、齊白馬寺釋曇憑
- 247、齊北多寶寺釋慧忍
- 唱導 十人
- 248、宋京師祇洹寺釋道照
- 249、宋長干寺釋曇頤

29	29		30	30	30	30	30	30	30
2	1		17	15	14	13	10	8	7

- 250、宋瓦官寺釋慧瓊
- 251、宋靈味寺釋曇宗
- 252、宋中寺釋曇光
- 253、齊興福寺釋慧分
- 254、齊興福寺釋道儒
- 255、齊瓦官寺釋慧重
- 256、齊正勝寺釋法願
- 257、齊濟隆寺釋法鏡

右十三卷十科凡二百五十七人

29	25	29	29	29	29	29	29
13	33	10	9	7	6	5	3

注

(1) 山内晉卿著支那佛教史之研究所收高僧傳の研究(大正七年十二月稿)は當時としては珍しい中國學の立場から研究を進めた異色のものであつた。本稿も山内教授の研究方式を参照しながら、その後の研究成果をふまえて稿をなした。陳垣著中國佛教史籍概論(一九五五年十二月北京科學出版社)は、一九四二年九月二十三日附の縁起をもつた戦時中の著作であるが、さすがに中國老學者の見識學解の隨處に見られる好著であり、佛教史學研究の立場からは不必要のところもあるが、日本の研究者にとつて裨益するところは大きい。一九六八年には Biographies des moines éminents (Kao seng tchouan) de Houei-kiao, traduites et annotées par Robert Shih. 第一卷より第三卷までの譯經篇完譯の第一分冊が發行された。この外にも Arthur Wright 教授の佛圖澄傳英譯、Arthur Links 教授の道安傳英譯などがあるが、なお試譯の域を出ない。名僧傳については春日禮智氏の「淨土教史料としての名僧傳指示抄名僧傳要文抄並に彌勒

高僧傳の成立(上)

(2)

如來感應抄第四所引の名僧傳に就いて「が貴重な資料となる(宗學研究第十二號、昭和十一年七月刊)。牧田編の梁高僧傳索引(中國高僧傳索引第一卷、昭和四十七年三月刊)も中國佛教史研究の完全を期するための一つの試みである。本研究における弘明集研究報告は近く第一冊(遺文篇)が上梓されるが、さらに篤學の研究者によつて出三藏記集の研究(一部は宇井博士によつてすでになされた「釋道安研究)が進められるならば、中國佛教上代史の研究は、僧祐、寶唱、慧皎の事實究明とあいまつてより深められることとなる。續高僧傳卷六(大正五〇、四七一b)釋慧皎、未詳氏族、會稽上虞人、學通内外、博訓經律、住嘉祥寺、春夏弘法、秋冬著述、撰涅槃經義疏十卷及梵網經疏行世、又以唱公所撰名僧傳頗多浮沈、因遂開例盛廣、著高僧傳一十四卷、其序略曰、前之作者或嫌以繁廣刪減其事、而抗迹之奇多所遺削、謂出家之士處國賓王、不應勵然自遠高踰獨絕、尋辭榮棄愛、本以異俗爲賢、若此而不論竟何所紀、又云、自前代所撰、多曰名僧、然名者本實之實也、若實行潛光則高而不名、若冥德

適時、則名而不高、名而不高、本非所紀、高而不名則備今錄、故省名皆代以高字、傳成通國傳之、實爲龜鏡、文義明約、卽世崇重、後不知所終、江表多有裴子野高僧傳一帙十卷、文極省約、未極通鑒、故其差少。

- (3) 梁書卷二十二、太祖五王南平元襄王偉傳 太原王曼卿卒、家貧無以殯斂、友人江革往哭之、其妻兒對華號訴、革曰、建安王當知、必爲營理、言未訖而偉使至、給其喪事、得周濟焉、……晚年崇信佛理、尤精玄學、著二旨義、別爲新通、又製性情幾神等論、

- (4) 梁書卷三十六江革傳 革歷官八府 長史四王 行事二、爲二千石、傍無姬侍、家徒壁立、世以此高之、

- (5) 金樓子卷二、聚書篇 又就會稽宏普惠皎道人搜聚之。ここにいう宏普寺はあきらかでないが、元帝が「今年四十六歳」という、今年は、元帝の承聖二年（五五三）であり、慧皎は五十七歳、入寂の前年にあたる。嘉祥寺から宏普寺に隠棲していたのであろうか。また同篇に、張豫章紹經餉書如高僧傳之例是也とあり、大同五年（五三九）に豫章内史となつた張綰（四九二—五五四）から高僧傳を得たことを記すのも、慧皎の高僧傳を指すのであろう。

- (6) 續高僧傳卷一、梁揚都莊嚴寺金陵沙門寶唱傳（大正藏五〇、四二六 b2四二七c）参照。

- (7) 大正藏經本高僧傳（高麗本）の校記によれば、宮内廳本にはこの慧皎傳補遺百二十七字を缺いてゐる。

- (8) 高僧傳卷十四（大正藏卷五〇、四二三a）此傳是會稽嘉祥寺慧皎法師所撰、法師學通内外善講經律、著涅槃疏十卷梵網戒等義疏、並爲世軌、又著此高僧傳十三卷、梁末承聖二年太歲癸酉、避侯景難、來至益城、少時講說、甲戌年二月捨化、時年五十有八、江州僧正慧恭經始葬廬山禪閣寺墓、龍光寺僧果同避難在山、遇見時事、聊記之云爾、

- (9) 南史卷六四、張彪傳參照。
(10) 高僧傳では、竺潛（法深）は王敦の弟であると明記しているが、世

説注においては（德行篇）では、桓彝の侍僧法深は「不知其俗姓、蓋衣冠之胤也」とする。

- (11) 高逸沙門傳曰、法師居會稽、皇帝重其風德、遣使迎焉、法師暫出應命、司徒會稽王、天性虛濟、與法師結殷勤之歡、師雖升履丹墀出入朱戟、泯然曠達、不異蓬宇也。

- (12) 卷八 僧鍾傳（三七五c）時與鍾齊名比德者……僧寶等並各善經論、悉爲文宣所敬、迭興講席矣。また慧次傳（三七九c）時謝寺又有僧寶……一代英哲、爲時論所宗。また寶亮傳（三八二a）曠野寺僧寶亦並齊代法匠、寶又善三玄、爲貴遊所重。

- (13) 高僧傳卷一、康僧會傳（大正藏五〇、三二五c2三二六a）皓問曰、佛教所明、善惡報應、何者是耶、會對曰、……易稱積善餘慶、詩詠求福不回、雖儒典之格言、卽佛教之明訓、皓曰、若然則周孔已明、何用佛教、會曰、周孔所言略示近迹、至於釋教則備極幽微、故行惡則有地獄長苦、修善則有天宮永樂……後使宿衛兵入後宮治園、於地得一金像高數尺呈皓、皓使著不淨處、以穢汁灌之、……俄爾之間、舉身大腫、陰處尤痛……

- (14) 法苑珠林卷十四（大正藏五三、三八八c）齊建元初（四七九）太原王琰者、年在幼稚、於交趾賢法師受五戒、以觀音金像令供養、遂奉還揚都寄南潤寺、琰晝寢夢像立于座隅、意甚異之、卽馳迎還、其夕南潤失像十餘、盜毀鑄錢、至宋大明七年（四六三）秋夕、放光照三尺許、金輝映奪合家同觀、後以此像寄多寶寺、琰適荆楚垂將十載、不知像處、及還揚都、夢在殿東、衆小像內的的分明、詰旦造寺如夢便獲、於建元元年七月十三日也、故琰冥祥記自序云……

また牧田著六朝古逸觀世音應驗記の研究參照。

- (15) 世説新語の注を書いた劉峻（四六二—五二二）であれば益都寺記の著者としてもふさわしいが、彼は山東平原（鄒平縣）の人、慧皎の序には彭城の劉俊と明記している。

- (16) 梁書卷五十劉勰傳 勰早孤、篤志好學、家貧不婚娶、依沙門僧祐、與之居處積十餘年、遂博通經論、因區別部類錄而序之、今定林寺經

藏、經所定也。また梁高僧傳卷十一僧祐傳にも、僧祐が人をして要事を抄撰して出三藏記集、釋迦譜、弘明集などをつくつたと記していることは、注目すべきである。

山内晉卿教授は、一、高座（帛尸黎蜜）別傳、王秀撰、梁高僧傳の本文（卷一、三二八a）に瑯琊の王珉が蜜（一三四二）に師事して、後に序を作つたことに注目して、王秀は王珉か、二、また晉書卷六十五、王導傳附見の王珉傳によれば、珉は太元十三年（三八八）二十八歳で死んでいるから年代的には合致せずとして疑問を提起している（支那佛教史之研究一五頁）。高座別傳は世説の注（卷上之上、言語篇、高座道人が中國語を話さなかつたので、ある人がその譯を聞くと、簡文帝は、彼は問答應對の煩わしさをはぶくためなのだと言つた）に高座別傳を引用しているが、これは慧皎の帛尸黎蜜傳の成立に大きく影響している。また梁高僧傳卷十一、齊京師安樂寺釋智稱（四三〇—五〇一）は少年時代は王玄謨の軍にあつたが、のち、三十六歳で出家して律部をおさめた。十誦律を講ずること數十百遍、十誦義記八卷を撰している。同卷明律の論に、「齊・梁の間に智稱の律學は聞えたので、號して、命世の學徒と稱し、傳記して今にこれを尙ぶ」というがごとき、この傳記した小篇にいたつては、枚舉に違ないほどである。そうした小篇があつまつて、後に高僧傳に大成されてゆくのである（大正藏卷五〇、四〇二b、同四〇三b）。

梁高僧傳卷十四（大正藏卷五〇、四二二c）康泓專紀單開、王秀但稱高座、僧瑜卓爾獨載、玄暢超然孤錄、康泓のことは卷九單道開傳、僧瑜のことは卷九僧瑜傳に、吳郡の張辯の傳贊を載せているし、卷八玄暢傳には、臨川王獻がその碑を立て、周顒が文を製したことを傳えて、玄暢傳の本文が周顒の碑文に據つてゐることを示している。高座道人帛尸黎蜜については前注参照。

自前代所撰多曰名僧、然名者本實之實也、若實行潛光則高而不名、寡德適時、則名而不高、名而不高、本非所紀、高而不名、則備今錄、故省名音代以高字、其間草創或有遺逸、

各競舉一方不通今古、務存一善不及餘行、逮乎即時、亦繼有作者、然或褒贊之下、過相揄揚、或敘事之中、空列辭費、求之實理無的可稱、

高僧傳目錄對照表は高僧傳卷十四の總目と、高僧傳本文との照合の上に成つたものである。50道安傳には在俗の王嘉を録し、60道立附見の僧常・法濟、63竺道壹附見の道施、64慧虔附見の曇誠・智明、129智秀附見の法整、175僧審附見の法隱、213僧覆附見の慧琳は目錄にあつて本文に記載はない。目錄附見に名なく、本文に記事のあるものはすこぶる多いが今は摘記しない。この對照表によつて高僧傳の成立について考えられるところはすくなくない。後勘にまちたい。